

2009年12月
第3回国際シンポジウム

藤田素子
東南アジア研究所 G-COE 特定研究員

セッション1：人為攪乱の再考

このセッションでは生態系を改変する力としての人為攪乱に着目した。異なる自然の観方をもつ地域では、制度や管理方法も異なり、生態系への攪乱のありかたも変わる。そこで、自然環境の違いはどのように自然の観方と関連しているのか、伝統的な管理方法は近代集約的な管理方法とどう異なるのか、という点から人為攪乱を再考した。祖田亮次氏は日本の河川行政に着目し、地域の人々が洪水を受け入れ、ともに生きる文化を育んできた歴史を紹介した。その後ヨーロッパの近代的な河川改修システムを取り入れる際、日欧の環境の違いを考慮しなかったことを問題点とし、地域固有の人と自然の関係に基づいた管理が必要であると述べた。深町加津枝氏は日本の里山景観における土地利用変化を紹介し、近代的な管理方法に比べ、伝統的な管理方法のほうが高い植物多様性を持つことを示した。一方 Sara Cousins 氏が示したスウェーデンにおける草原の土地利用変化においても、非集約的な管理のほうが集約的な管理よりも高い多様性を保つことを紹介した。異なる環境をもつ二地域の事例からは、生物多様性保全のためには生態系を放置するよりも、適度な攪乱が必要であることが示唆された。しかし現代社会において、伝統的な管理の継続が難しいことから、集約的でない新たな管理方法を見つけるべきだろう。Eben Kirksey 氏はコスタリカの国立公園で、意図せずして特定の植物が繁茂し、牧場だった時期には生息していた多くの生物を排除する結果に至ったことを報告した。人と自然の関係を評価するにあたって、管理が伝統的か近代的であるかによらず、人為攪乱のエージェントとしての生物種に着目することが鍵となることが結論づけられた。